

十 盲人住太夫(四代目)

記憶のよい美音家

盲人は目あきよりカンがよい、その一人は淨瑠璃太夫にもある、住太夫がそれである。

紀州田邊の産、幼年の頃盲人藝として三味線を稽古したが、美音が惜まれて太夫に轉身、文樂に出勤、妹脊山吉野川の掛合の雛鳥が大得意、文樂と座摩の芝居と同時に双方から引張られて掛持ちで雛鳥をつとめた。

初日の前に弟子に本を讀ませて、たいてい三度か四度で覚え込むといふ恐ろしい記憶力。幾十と云ふ語り物を悉く暗記して誤らない。人力車で住吉に參詣、汗になつてフウフウ云つてゐる車夫の息づかひを聞きながら、沼津の平作の心持を探つて採るといふ凝り性。利かぬ氣者の一面にはまた洒落者としても知られてゐる。

文樂を不平で退き、彦六座の槽下で氣勢を揚げた。語り物の得意とするのは、「鳴戸十郎兵衛内」、「大文字屋」、「葛の葉」、「爪先鼠」、「和田合戦」、「梅由聚樂町」、「長局」、「朝顔宿屋」、「先代御殿」、「廿四孝十種香」これを悉く無本で語る。尤も三代住太夫も中年で盲人となつた

が、それ以上に物覺えの敏い人だと云ふ話。

明治二十二年一月二十二日、六十一歳で死去、この人も古靱同様、小柄な人だが氣魄で一ばい張切つてゐた。

一時は越路太夫が江戸で住太夫を名乗り、大阪の住太夫と二人住太夫の紛争があつた。後の越路の文樂櫓下問題から、住太夫の引退となつたその遠因の一つ。

阿波座太郎助橋に住む、俗稱「太郎助橋」で通る。

以上、まさに水滸傳梁山泊の群像圖か、何といふ多色多彩の朗らかな風景であらう。長門太夫等天保復興の功業が生んだ餘勢が、いかに明治當初の淨瑠璃界を激瀾たらしめたか、窺はれるではないか。